

イエスはこうお答えになった。「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る。わたしに仕えようとする者は、わたしに従え。そうすれば、わたしのいるところに、わたしに仕える者もいることになる。わたしに仕える者がいれば、父はその人を大切にしてください。」
-ヨハネ 12 章-

新しい思いと心

四旬節、第5日曜日になりました。来週は、枝の主日を祝います-主の受難の主日とも呼ばれます。この四旬節に、私たちがイエスとイエスの十字架を、ありのままに見ることができるよう、新しい思いと心が与えられるよう神に願い求めてきました。新しい心について、今日、私たちはエレミヤの預言を聞きました。一神は私たちの心に彼の律法を記すでしょう。外部の規則に従う代わりに、私たちは神の律法を心の奥にとめ、正しいことと間違っていることを見分けるでしょう。神は私たちを、正しいことをするように導くのです。

しかし、小さな困難が1つだけあります。それは、神の律法を内側から知って、新しい思いと心を得るためには、「死ぬ」必要があるということです。イエスは断言します。:「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ」。死ぬのは難しい。小麦の粒は、その殻の中では安全だと感じるかもしれませんが、しかし、神は一粒の麦には想像できない計画を持っておられます。暗い地中に置かれると、水と暖かさがその殻を開き始めます。躊躇しながら、小さな根が出てきて、土から栄養を取り始めます。静かな暗闇の中で起こることは、光へと突き進み、30倍、60倍、100倍の実を生み出します。

もちろん、種は実際に死ぬことはありません。根、葉、実など、まったく新しいものに完全に変化します。同様に、毛虫は毛虫であることを手放し、別の何か、しばしばはるかに美しい蝶に変身します。

同様に、私たちもまた、私たちが新しい思いと新しい心を持った新しい人に変身できるように、日々の十字架の旗じるしの下に身を置く必要があります。私たちは死ななければなりません。一羨望、貪欲、欲望、精神的な怠惰、傲慢に死ぬ—それらは私たちを神から遠ざけるものです。私たちがそれらの悪徳に死ぬならば、彼らは私たちを変容させ、私たちを天国に連れていきます。罪に死に、神のために生きなさい。「時は満ちた」とイエスは言います。

四旬節の主要な目標の1つは、私たちが自分の死についてよく考え、死を乗り越える方法を理解できるようにすることです。好むと好まざるとにかかわらず、私たちは、一人残らず死ななければならないのです。私たちはそれを隠し、無視し、そして否定しようとしています。しかし、私たちはそれから逃れることはできません。問題は、私たちは死んだ後、社会に何を残すのかということです。イエスでさえ死を恐れていました。「わたしは心騒ぐ」(ヨハネ 12:27)。しかし、最後に、彼は十字架を受け入れたので、父によって栄光を与えられました。イエスは世界に大きな贈り物を残しました—それは愛と慈しみです。「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」(ヨハネ 15:13)。私たちはまた、その愛、つまり十字架上の愛を分かち合うよう招かれています。ただ十字架に至る道を通してのみ、私たちはイエスと隣人の愛の中で、思いと心を新たにすることができます。

「自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る。」(ヨハネ 12:25) 2021年3月21日 クラレチアン宣教会 パウロ・ニュ・イ助祭